

20100508 日本危機管理学総研_議事録

日時：2010年5月8日（土）15:00-17:40

場所：東京・竹橋 ちよだプラットフォームスクウェア

テーマ：「グローバル補給戦—危機としての大戦における戦略の可能性—」

発表者：荒川憲一氏（防衛大学校教授）

参加者：参加者 22人（発表者除く）

（大学講師、会社経営者、会社員、銀行員、公務員、行政書士・司法書士、システムエンジニアなど）

理事長から開会挨拶、戦略研／危機研の趣旨。また、海洋安全保障研究所から挨拶

今回ミーティング趣旨

→資料「戦略研概要」

近況報告：

- ・大学で講師を務めており、『諸君』等で原稿も書いてきた。本日は太平洋戦争の時代の歴史的な背景に関する話題でありとても興味深いテーマと感じて参加した。
- ・仕事の関係で普天間基地を見てきた。現在の安全保障を考える上で何かヒントがあればと思って参加した。
- ・大学院で海洋法を研究しており、海上を通じたロジスティクスを考える上でも、本日の研究は興味深いと感じている。
- ・日ごろ、公務員をしており、安全保障についてもっと知りたいと思って参加した。

発表：「グローバル補給戦—危機としての大戦における戦略の可能性—」

目標：「戦争の勝敗を分けたものは何かという視点から戦争史を分析すると、ひとつの原則が浮上する。それは相手よりも早く、来るべき戦争の形態を予測し、そこから戦争の勝敗を分ける要因を導出し、その要因により速く資源を集中（投資）した方が勝利するという原則である（これは戦略では）。一方、1937年7月から1945年8月まで戦われた先の大戦はアジア太平洋戦争（大東亜戦争）と呼ばれる。まず、この大戦の開戦経緯を日中戦争から太平洋戦争までの戦争の拡大と転換経緯、そこでの戦略が果たした機能などを分析する。次に、第二次大戦の形態は総力戦であったことを踏まえ以下について分析したい。」

※講師：講演要旨より。

戦争研究のアプローチ

治乱興亡の後を詳らかにする→歴史学

戦争の勝敗を分けるものは何かを中心に据える→歴史学+戦略

戦争の勝敗を決めるもの

来るべき戦争の携帯を的確に予測し、そこから勝敗を分ける要因を導出し、その要因に相手より速く資源を集中(投資)した方が勝利する(仮説)≡戦略

独立変数と従属変数

従属変数:Dependent Variable

戦いを分ける要因 The factors which determine the win and lose

(航空戦力、火力、生産力=経済力)

↑

独立変数:Independent Variable

戦争の形態:the Picture of war

$Y_i=F(x_i)$

戦争の3形態

軍人・傭兵(プロの戦争):Professional's War ナポレオン戦争

全国民の戦争=総力戦:total war 第一次世界大戦・第二次世界大戦

現代の戦争=非対称戦:Asymmetric warfare ベトナム戦争など

I アジア太平洋戦争(大東亜戦争)の開戦経緯が示唆するもの

II-1 グローバル補給戦の概念

II-2 第二次世界大戦において枢軸側にグローバル補給戦の原則を適用できる機会があったか(つまり、負けない戦略はあったか)

前段 I アジア太平洋戦争(大東亜戦争)の開戦経緯が示唆するもの

第二次世界大戦の開戦経緯としての第一次世界大戦

セルビア青年によるオーストリア皇太子夫妻暗殺事件

オーストリア+ドイツ VS セルビア+ロシア

※また、当時、露仏は協力関係

ドイツはシュリーヘンプランにより、ロシアを遠く広大な面積を誇る直接たたくよりも自国に近く国土の狭いフランスを叩く方を選択。

勃発した第一次世界大戦は総力戦の形態となった。

第一次世界大戦の規模

世界面積の 66%、36,825,935/55,500,000 平方マイル、人口にして 1,475,309,000 88%

世界の貿易量 81,084,534,000 円のうち、交戦諸国の貿易量 69,507,920,000 円と 85.6%

国家総力戦の勝敗を分けるもの→経済力
軍事力を支える兵站(補給・輸送)の戦い
兵站を支える国力(生産力=経済力)

第一次世界大戦でドイツが敗れた要因

最大の要因 連合国(英国)による封鎖(Blockades)兵站を支える経済力が崩壊
ドイツは半飢餓状態に陥り、最後の攻勢失敗
但し、ドイツは軍事占領されたわけではない。

日本はドイツから何を学んだか

陸軍

総力戦の経済的側面に強い関心

ドイツから戦時経済の運営(産業動員)を学ぶ

海軍

多数の調査団を派遣したが、総力戦を軽視したというのが通説。

実際は、日中アウタルキー体制で陸軍と一致していた。

但し、ドイツのUボートの通商破壊戦(無制限潜水艦戦)には無関心。

連合国側で参戦した日本(陸軍)がドイツに引き付けられた理由

ドイツが原料の多くを海外に依存している地政的な条件が似ていること

ドイツが連合国よりも迅速な産業動員をしてこと

※しかし、ドイツ陸軍の戦争計画(シュリーヘンプラン)には原料経済のことが全く考慮されず、戦時需要の対策はされていなかった。

→原料の国外輸入ほとんど不可能な状態に。

戦時原料局長に就任した実業家ラテナウが創出したのが、「差押え」という概念。

※現在、我々が使用している「差押え」とは異なる概念。

従来は「徴発」つまりすべての物資を国が抱えこむ戦略がとられたが、「差押え」は一時的に工場生産を停止し物資の流れを転換させる。つまり、軍需中心の生産体制に切り替える。

日本の場合

資源確保重視。小磯「帝国国防資源」The Scariness resources

日本は不足した資源を中国に求める。当初は平和的だったが・・・。

綿花を得るため、勢力拡大を図るようになる。

満州事変→日満ブロック

華北分離工作→日満支ブロック

日華事変(日中戦争)

華北分離工作の実態

日満ブロックの成立と問題点

満州事変の計画実行者:石原完爾の構想

佐藤鉄太郎の海主陸従論に対するアンチテーゼ

対米戦略(艦隊 VS 艦隊か、大陸で海を制するか、つまり米国の封鎖と戦うか)

北支事変から支那事変への拡大

上海への飛び火(通説)

大山事件の意味

蒋介石とナチスの関係

蒋介石の戦略⇨毛沢東の抗日戦争論→長期戦に持ち込む

日本の対中戦争計画

日華事変 奇妙な戦争

宣戦布告し 日中双方に事情

陸戦主体

物資をめぐる貿易戦であり通貨戦(経済戦)

都市(点と線)で農村(面)を包囲しようとした

農産物は農村にあり中国側に主導権。

日満経済ブロックの実態

→戦争物資の自給率は上昇しなかった。

- ・ 貿易循環 Trade circulation
- ・ 円元等価(パー)策による誤算
- ・ 中国綿花の生産低下

などがその理由。

米英蘭の対日経済制裁

1937年～1938年10月〔制裁潜在期〕

1938年11月～1940年3月〔制裁警告期〕

1940年4月～1941年5月〔部分的〕

ドイツの西方攻勢、日独伊三国同盟、日ソ中立条約

1941年6月～開戦まで〔全面制裁期〕

南部仏印進駐、資産凍結=対日全面禁輸

大戦経緯のターニングポイント

三国同盟(1940年9月)

日ソ中立条約(1941年4月)

南部仏印進駐

開戦決定の議論(1941年11月5日御前会議)

後段 II-1 グローバル補給戦の概念

後段のねらい

・グローバル補給戦という概念を使用して第二次世界大戦の勝敗に戦略が果たした機能を分析しようという試み。

具体的にはグローバル補給戦というモデルを念頭に枢軸国側にこの大戦に負けない戦略はなかったか試論。

戦争回避の方策

状況の推移を注視する(決断しない)

海のゲリラ戦:非対称戦

英米可分論:英蘭に宣戦布告(米国を参戦させず)

1942年 枢軸結合、東守西攻戦略

戦争形態という視点から第二次世界大戦を見る

総力戦→経済力の戦い→グローバル補給戦という形態

「こうすれば勝てた」という類の議論はアカデミズムでは真面目に評価されない。

ただ、本日のテーマに関しては小室直樹氏や赤木完爾氏の研究が盛ん。

歴史とは

実際あった事実は当然歴史であるが、選択できたけれどもしなかった戦略も歴史に含まれるのでは。

つまり、選択できたのになぜ選択しなかったのか、なぜその戦略が選択されなかったのか。

これも歴史研究ではないか。

グローバル補給戦の原則

・グローバル補給戦では、決選場での勝敗が決するまで、つまり相手が倒れるので相手以上の量と質に勝る戦力をその戦場に継続的に送り込めた方が勝利するという原則が貫かれ

た。

- ・補給力とは生産力(戦力造给力+輸送力)
- ・この補給戦では、交戦国双方が敵の補強力を破壊し、自国の補給力を防護して相対的補給力の優越を競い合うという面もあった。

第二次世界大戦でアジア太平洋正面での連合軍(米軍)のとした戦略

米潜水艦は 52 隻を失ったが、日本は 1900 隻沈没。

さらに資源地帯から日本本土への資源供給を遮断し日本の戦争経済の息の根を止めた。加えて B-29 による戦略爆撃により日本の都市という都市が灰燼に帰した。

一連の連合軍側の戦いはグローバル補給戦の原則に適ったもの。

では枢軸国側にこの原則を活用する戦略ないし機会はなかったか。この大戦に負けない可能性はなかったか。

→可能性は高いものではないが、活用できる戦略はないことはなかったし、負けない可能性は残されていた。

ただ、勝敗の岐路の時期は 1942 年の春かに秋と極めて限定されていた。

真の意味での第二次世界大戦

第二次世界大戦は 1939 年 9 月にはじまった。真の意味での世界大戦は 1941 年 12 月の日本海軍航空隊による真珠湾攻撃により始まった。米国が日独伊に宣戦し英(仏)ソ連側に参戦し、ヨーロッパとアジアの戦争が結合し枢軸側(日独伊)VS 連合側(米英ソ連中国)の世界大戦となった。

枢軸側が負けない戦局・戦争の形とは

日本もドイツもアメリカを占領する力がない。可能な選択肢は二つ。

- ・ハワイを占領するか
- ・枢軸結合を目指しての「東守西攻」戦略

枢軸側がユーラシア大陸を制覇してアメリカ大陸と向き合う(対峙する)という引き分けの形を採れる。

枢軸結合

ソ連ルート

東シベリアから北上するルート。ソ連との中立条約があるため、条約違反を嫌う昭和天皇が裁可しないだろう。

南方ルート

枢軸側は 65 万の英国中東覇権軍を撃破しなければならない。この英国苦軍への補給ルート

は 1942 年にはインド洋経由のルートのみであった。

枢軸国側が勝利の可能性が出てきた 1942 年の春から秋にかけて、その勝利のために大きな役割を期待されたのは日本海軍。その鍵は機動部隊の運用にあった。

1942 年、ドイツ海軍のフリッケ作戦部長は当時、訪独していた野村海軍中將に日本海軍のインド洋進出について要望。つまり、東守西攻を提案してきた。しかし、日本はこれを飲まず、対英米戦略では東攻西守だった。

英米軍の状況

1941 年冬、アラン・ブルック英軍参謀総長の日記では、「もっとも緊要なことは船舶と兵員及び武器を差し向けることによってインド洋の海上交通路を保持することだった。もし、この交通路が失われれば、あらゆるものインド・中東とその石油、就中最重要なヨーロッパの枢軸国周辺の包囲網も失われるからである」

※アラン・ブルック『参謀総長日記』291 頁。

英国のマダガスカル占領作戦

枢軸結合を恐れた英国は、アフリカ東海岸洋上の補給ルートを安全なものにするため、マダガスカル占領作戦を 1942 年 4 月 24 日決定した。

同年 5 月 5 日に実行された(日本海軍の珊瑚海海戦と同時期)。

3 個歩兵師団、海軍空母 2 隻、戦艦 1 隻、巡洋艦 2 隻基幹という強力なもの。

1942 年 11 月のトーチ作戦

トーチ作戦(連合軍の北アフリカ上陸作戦

によってロンメルは両面作戦を強いられアフリカから撤退、枢軸結合の可能性はなくなった。他方、日本海軍もガダルカナルで消耗戦を強いられ翌 1 月撤退を決定。

同時期ロシア戦線でもスターリングラードの戦いでドイツの敗北が決定的となった。

むすび

実際あった歴史は当然歴史だが選択できたけれど選択しなかった歴史も歴史では。

いつ何を決定しなければならぬかが重要。

グローバル補給戦の件では、なぜ日本海軍はマダガスカルを基地としての機動部隊を使った大規模な通商破壊戦を思いあたらなかったか。

質疑応答・意見：

・枢軸結合について。ソ連ルートが昭和天皇の裁可を受けられたとしてルートとしての戦略的な可能性

→可能性は大いにあった。ソ連はドイツと戦っており、両面から挟む形になる。
諜報活動について。日本の諜報能力は現場レベルでは優れていたが、それを俯瞰して用いるのが弱かったのでは。

・日本の中東進出によりドローに持ち込める可能性についてだが、厳しいのではないか。
何故、日本ではIFの研究が盛んでないのか。

→歴史ではIFは眉つばとされてきた。外国では盛んだが、日本では立証できない議論は嫌われる。しかし、到底選択できなかつた選択肢と、選択できたけれども選択しなかつたとい選択肢とは区別されるべきであり、それをきちんと分けて議論すれば他の学者さんたちも納得してくれるだろう。

・日米の戦力の相違について。日本と米国では戦争の損害の規模が大きく違うがどのような要因があるのか。

→日本は相手の商船を狙っていない。軍艦など難しい敵ばかりを攻撃していた。
日本はアメリカに対して敵を探知する能力が弱かつた。日本は民間船籍が攻撃されたが、攻撃を受けた地域の傾向を見ると資源のある大陸側ではなく海域で海軍が護衛している際のことの方が多かつた。

以上

※参照資料

荒川憲一『日本危機管理学総研講演資料 グローバル補給戦——危機としての大戦における戦略の可能性一』（2010年）